筑波大学・学生・卒業生

星紳一
日本ヒューレット・パッカード株式会社勤務
1982年　筑波大学第二学群比較文化学類卒業

インターネット上の同窓会

（同期生Ａ　在東京）「1 年先輩の人から聞いたんだけど、『ホーム・カミング・デー』っていうのがあるらしいよ。筑波大学を卒業してから 20 年目の卒業生を対象にした大同窓会。多分、学園祭にあわせて、秋に筑波で。今年は、ぼくらがその対象になっているから、もうじき、案内状でも届くんじゃないかなぁ。」

（同期生Ｂ　在兵庫）「そのホーム・カミング・デーとかいうのに行くん？行くんやったら、筑波で宴会でもせーへん？」

（同期生Ｃ　在長崎）「どのくらいの人が集まるのかなあ。筑波は遠いからなあ。誰かML でも立ち上げてくれて、盛り上がったら考えてみようかなあ。」

（同期生Ｂ　在兵庫）「あ、それええやん。君、やってみなはれ。」

（同期生Ａ　在東京）「え？　ぼ、ぼくがやるの？　わ、わかりました、はい。」

2002 年夏、こんないい加減なやり取りが発端となり、比較文化学類 1978年入学者による ML（hibun78ML）が開設されました。ML とは、メーリング・リストの略。あるアドレスに電子メールを送信すると、登録されているメンバー全員にそのメールが配信される仕組みです。単にメールが同報配信されるだけでなく、インターネット上で、過去のメールを閲覧したり、文書や写真、さらには音楽を共有したりすることもできます。

10 月に筑波で開催されたホーム・カミング・デーに参加した比較文化学類 OB は、結局、わずか４名でしたが、hibun78ML の方は 80 余名の同期生のうち 50 名もの参加を得ることができました。ML の開設直後から盛況を極め、開設後1年間で5,000通ものメールが飛び交う、「24 時間営業のインターネット上のバーチャル同窓会」状態が続いています。

ML 開設初期の話題の中心は、当然のごとく学生時代の思い出話。二十余年を経たおぼろげな記憶も、何人かのやり取りの中で鮮明に浮かび上がってきました。

「オレの部屋のカルピスをかってに飲んでいた奴は誰だったか？」

「雪夜に平砂宿舎の芝生で、バイオリンを弾いたっけ。」

「悩みごとを語り合いながら、学園内のペデストリアンを夜通し歩き続けたことがあったよね。」

ひとつひとつの話題は、一見、たわいのないエピソードですが、その背後には重く、深い思い出があります。初めての一人暮らしの孤独の中、人生について思い悩み、答えを求めていた私達の姿がそこにはありました。

曰く、「同じ空気を吸い、ともに酒を飲み、笑いあい、語りあい、ときには、傷つけあいながら、それぞれが、孤独なたたかいをつづけていた。」

曰く、「あのときの出来事の周辺が少し見えてきた。長すぎた。あのころ、夜は、濃すぎた。長すぎた。少しずつ思い出してきた。でも、まだ確信が持てない。あの濃密な空気の中で。」

筑波にいた時間は、ほんの4年間。その後の人生に比べれば、たいへん短い期間です。それでも、筑波での4年間は、大きな存在として私達の記憶に残っています。そして、その時空を共有した仲間は、20 年の歳月を経ても大切な友であり続けています。

筑波大学の現状

さて、現在の筑波大学に目を向けてみましょう。本稿の執筆依頼を受けてから、インターネット上で筑波大学の状況を調べてみました。主な情報の入手先は、筑波大学のウェブサイト。あくまで、外向きの「公式」な情報発信源ではあるのですが、さまざまな情報を入手できました。過去に発行された「筑波フォーラム」も、何号か見つけることができました。ちょうど 63 号から 3 号連続で「筑波大学の将来設計」というテーマで、学群、大学院、各センターの諸課題を取り上げていました。そこからは、私達が学生生活を送っていたころとは、まったく違った筑波大学の姿が見えてきました。

・国立大学の行政法人化
・大学院重視の体制への移行
・研究科、学群の再編
・医療短期大学の学類化
・図書館情報大学との合併
・教員就職率の激減
・学生の質の低下

個々の内容に関しては、本冊子のバックナンバーと重なりますので、ここでは言及しませんが、「ファカルティ・ディベロッ

プメント」なる用語を使って教員・授業の質の改善を訴えたり、「アカウンタビリティ」なる言葉を用いて象牙の塔にこもることを戒めたりしている様子が印象的でした。また、学生相談室等、学生の人間的な成長・発展を支援する活動も試みられているようです。

筑波大学の開学直後の時期にあたり、「新構想大学」だの、「建学の理念」だの、集会や掲示に対する「許可制」だのを巡り、折につけ学生と大学当局が対立していた、私達の学生時代とは隔世の感があります。

学生の姿が見えない

大学当局や教員の方々の問題意識や種々の努力には敬意を払いつつ、それでも大きな違和感を禁じえないことがひとつあります。それは、筑波大学の現状の問題点や将来の姿を論ずる議論の中に、現在、筑波大学に在籍する学生の姿がまったく見えない点です。学生からの問題提起や解決策の提案がないばかりか、教職員の方々の議論に出てくる「学生」はあくまで教育を受ける側としての存在でしかありません。

かつて私達の学生時代には、「学生は4年間しか筑波大学に在籍しない。それに対して、教員や職員は、もっと長い間、筑波大学とともにある。したがって、筑波大学のあるべき姿を決めるのは学生ではなく、教員や職員である。」という趣旨のことを大学当局側が主張していたと記憶しています。たとえ時間的には僅かな期間しか筑波の地には存在していなくとも、心理的には人生に非常に大きな意味を持つ年月を筑波大学で過ごした者にとっては、憤懣やる方ない論理です。現在の筑波大学においては、もう、このような乱暴な論理が存在していないことを期待してやみません。それでもなお、現在の議論の中に学生の姿が見えないことには大きな不安を感じます。

実業の世界においては、自社の利益だけを追求する企業は、すぐに社会・顧客に見放され衰退の運命をたどります。そのため、どんな企業でも「顧客第一」、「顧客の利益」を掲げた経営が行われています。業種によっては、もう一歩進めて、「顧客の顧客に対する利益」を考えた事業戦略が立案されたりもしています。もちろん、各企業の目的は営利の追求であるのですが、それでも、顧客のことをないがしろにしては企業の存続さえままならないのです。

大学の運営というものが一般の企業経営と大きく異なるのは当然のことです。しかしながら、大学が外部からどう評価されるかということのみに気を取られ、学生を教育の受け手としてのみとらえ、さらに、教員や職員の側の論理のみが優先されて、そこで学び・暮らし・成長する主体としての

学生の存在を忘れたとき、果たして筑波大学は「大学」として存在する意義があるのかという懸念すら禁じえません。単に高等教育を施すビル群としての「筑波大学」に誰も愛着を抱く人はいないでしょう。ちょうど、顧客や従業員のことを軽んじて、自社の利益のみを追求する企業の将来が閉ざされているように。

大学と卒業生の絆

ホーム・カミング・デーの際、北原学長の挨拶の中に、「これからの大学は、在籍する学生と現在勤めている教職員と卒業生の三位一体で発展させていくような形にならないといけない」という趣旨の言葉がありました。その後の座談会の場でも、大学が卒業生を支援する仕組みが欲しい旨の意見も出ていました。また、卒業生を一日講師に迎えた総合科目「卒業生によるオムニバス講座」も開設されています。確かに、筑波大学と卒業生の絆を作ろうという動きは存在するようです。

しかし、個人的体験に即して言えば、卒業後 20 年の間に筑波大学から私あてに届いた連絡は、今回のホーム・カミング・デーの案内 1 通だけ。筑波大学のウェブサイトを見ても、卒業生を念頭においたコンテンツは、卒業証明書の発行手続きに関する 1 ページだけ。これでは、卒業生にとって筑波大学が遠い過去の存在となってしまうのも無理もありません。

筑波大学の「唯一の同窓会」を自任する茗渓会も、卒業生に占める教職従事者の減少や、同窓意識の低下からか、会員確保に苦労されていると聞いています。コミュニケーション手段や個々人の集団帰属意識が多様化している現在、単に「筑波大学の卒業生である」ということだけで卒業生を筑波大学に結びつけることは難しくなってきています。

まずは大学自らが、卒業生へ直接的に情報発信したり、様々な便宜や交流の場を提供したりといった多様な努力を始めるべきではないでしょうか。

（ほし　しんいち）